

まんだら通信

第170号(通巻202号)

平成22年(2010)08月 佛誕2576年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

本当のお金持ち

殊の外、今年の夏は暑いようです。お元氣にお過ごしですか。先日お参りにいらした方と、「今年の夏は特別暑いようですね。年のせいだろうか」「いやいや、決して年ではなく本当に暑いんですよ」という話ができました。

このところ、新聞、テレビのニュースで流れるのは悲しくやり切れないことが多いですね。

大阪で亡くなつてた幼な子二人、そして百歳のお年寄りの行方不明。長寿でおめだたい筈が、どこにいるのか解らない、もう何十年もどこにいるのか解らない、そんな親子の関係って、私には考えられません。

どうしてこんな殺伐としたニュースが毎日流れるようになってしまったのでしょうか。

私たちの両親たちは、戦争と戦後の復



興に一生懸命で働きました。

気がついてみたら、戦争に負けて工場も道路も鉄道も、何から何までなくした日本が、GDP(国内で生産したものの総額)で世界第二位という、誰もがビックリするほど、欲しいものは何でもあるという豊かな国になりました。

お陰さまで、きれいなお家、自家用車、海外旅行、豊かな食事などなど、物質的には本当に恵まれて来たものだと思います。

でも、私たちの気持ちは豊かになってきているのでしょうか。何か大切なものが抜け落ちていくような気がしてなりません。

周囲との関係、親子兄弟の関係、考えてみたら、風習とか習慣とかも含めて煩わしいことなど、無いに越したことはないようにも思えます。

お隣で人さまが亡くなつていても、幼な子が空腹と恐怖で泣き叫んでも、助けることができない無力さに、いたたまれない気持ちになります。

私ってなんて情けないんだろうと思いました。

大阪の事件を考えると、二十三歳のお母さんは、多分、本音の話を聞いてくれる人もなく、幼な子二人を抱えての生活はそれはそれは大変な苦労があったと思います。

二十三歳といえば、おしゃれもしたい、たまにはお友達と遊びたい。周りにはみんな楽しそうに思える。

二十二歳で母親になった私には、このお母さんの気持ちが痛いほど分かります。でもそうではあつても、幼な子を見殺しにしたことは、許されることではありません。私にも娘がおります。彼女は幼

い子供三人を抱え、嫁ぎ先のご両親や、ご近所さんにお世話になりながら、それなりに一生懸命子育てをしています。

大阪の彼女にもご両親、ご兄弟、友人など、だれか身近に助けを求める人がいなかったのでしょうか。

人間関係の希薄さを痛感した事件でした。よく友人と話すことですが「殺すなら捨ててよ、拾って育てるわよ」と。私も全く同じ思いです。

住職の自分のブログ『さざえのつぶやき』に「仏様に預かった大事な生命。親御さんの気が変わるまで、肩代わり

することに、ためらいはありません。そのような時にはぜひ連絡してください。」と書いてありました。

虐待や、幼い命をないがしろにしてしまうこのようなことは、若い人たちはきつと自分自身を見失つてしまっているから、ではないでしょうか。

都会では「隣は何をする人ぞ」ということが、如何にも良いことのように言われた時期がありました。それって本当に良いことなのでしょう。お隣で人が亡くなつていても、幾日も気が付かないような、そんな世の中で良い筈がないのではと思います。

時代だから仕方がないと、物分かりが良くなつてしまつて、何か大切なものを忘れてきたような気がします。

時の流れに身を任せることも、時には必要なことでしょう。けれども、敢えて流れに逆らうことも大事なことでないでしょうか。

この辺で立ち止まり、本当の豊かさとは心が満足することではないのか、一度ゆつくり考えてみたいと思います。

私たちが忘れてきたもの、置き去りにしてきたものは、自分にはなく相手に寄り添う、温かい心だったのではないのでしょうか。今ならまだ、間に合うような気がしています。あらためて子供たち、孫たちに『日本人の心』を伝えて行きたいと思つています。

高橋 宏子

や夜、毎日のように出かけました。その甲斐あって、市の大会で1位になり、県大会ではまさかの3位だったそうです。

ダメだろうと前評判だった、サッカーの日本代表が、世界大会で勝ち進んだことと同じ、素晴らしいことだと思います。

◆今月は、野草ではありませんが、めったに咲かない珍しい花なのでお目にかけます。今では多分栽培する人もいないと思いますが、『カライモ』といいました。2メートルほどになる茎を、みそ汁の具や、なますなどにしましたね。 2010.08.08 龍渉



果は、民主党の過半数割れ。

日本人の平衡感覚は鈍つていませんでした。取り敢えずは、「沈没」だけは免れましたね。◆これも先月、「そろそろ自分の“頭の配線”を考えなければ」といいました。で、今月の上の記事は“お寺の宏子さん”こと家内が、パソコンで書いたものです。お読みになって如何でしょうか。私は少し安心したのですが。◆今年の下立松原神社のお祭りは、7月31日と8月1日の土日でした。一番上と夏休みで帰郷中の次の孫も、支度から後片づけまでみんなと一緒に汗をかきました。◆上の孫は消防団の一年生ですが、操法大会とかの訓練で早朝

◆立秋を過ぎて、残暑というのだそうですが、実感が湧きません。暑さで身体を壊したり、亡くなったりする人がいます。お互い、呉々も気をつけたいものです。◆梅雨明けごろから、胃の辺りがシクシクして不愉快なので、昨日お医者さんに行きました。「ははあ。例の胃潰瘍かも知れないから、18日にカメラで覗いてみることにして、今日はお薬だけ出しましょう。」と。

一生使わなければならない“預かり物”の命。気をつけているんですが。◆先月号で「民主党が過半数をとれば、“日本沈没”が一気に進むことを覚悟しなければなりません」と書きました。そして参議院選挙の結

余滴

第五十六話 新聞拡張員

いきなり、こんな私ごとで恐縮でございますが、実は、この「につぼん人情小噺」が一冊の本に变身いたしましたして、名前も『笑って泣いて、ナミダ涙の大洪水！』につぼん聞き書き41話（MOKU出版刊）と変わって発売になったんです。内容は、これまでに皆さまにお知らせした「ちよつとよい話」、つまり四十一話を一冊にまとめたダイジェスト版ですが、おかげさまで大変な反響なのです。

「ありがとうございます。いま、電車を降りて改札口に向かう途中ですが、涙があふれて止まらないんです。ほんと、いい本です。あのね、実は、私の妻が親戚から『バカな女房だ』とか『家の恥だ』なんて馬鹿にされていますがね、私はそいつらにこの本を読ませたいですよ。女房はね、たったひとりで自分の両親、それから俺の両親、四人の面倒をみてくれて、最後まで看取ったんですよ。そりゃあ、うちの親戚たちの女房のような大学出のお嬢さんじゃありませんよ。中卒ですよ。器量も悪い。汚い恰好をしているかもしれない。でもね、俺にとつては、神様みたいな女房なんです。わかってくれますか？」

ありがとうございます。よかったですねえ。

まだお読みになっていらつしやらない方は、ぜひ、お求めいただけますよう、伏してお願ひ申し上げますが、さて、今日の話は、東京・白山の、とある粋なお鮎屋さんで聞いた新聞少年の話でございます。

主人公は、山田武仁くん。大阪の出身です。子供の頃からとてがんぼり屋さんで、つらいことがあつても、大阪の少年独特の笑いでつらさを吹き飛ばしておりました。が、学校を卒業して、働くことになった。

「なんか、おもしろい仕事はないかな」と探したところ、東京で「新聞配達員」を募集しているという話が耳に入った。新聞配達という仕事なら大阪でもできるけど、「東京に行けるのは魅力やな」と、いきなり新聞店に電話を入れた。

「あー、大阪からですけど、あきまへんか」

普通なら断るんですが、東京の新聞店の主、この山田クンに大変に興味を持った。

「よし、東京にいらつしやい。切符は、新大阪の駅長室に送っておくから」

そんなことができるんですねえ。約束の日、山田クンは入場券を買ってホームに入り、駅長室でたしかに東京行き切符を手に入れました。

さあ、がんばるぞ！ 新幹線の発車のベルが鳴りました。山田クンの新しい人生がこの時にはじまったのです。仕事は、思ったより大変でした。

朝は午前三時起床。折込広告を入れるのが大変です。でも、眠いなどと言つてられません。準備ができると、新聞配達のはじまりです。

たのですが、次に主人から与えられた新聞拡張員の仕事は、さすがの山田クンもうまくいきません。

プロ野球の切符とか洗剤とか、いろいろなお土産を待つて、新たな新聞の契約をもらいにいくのですが、これが天変なのです。

「え、〇〇新聞？ うちの昔から××新聞なのよ。帰つて、帰つて」

「新聞をとつてあげたら、何をくれるの？ 洗剤？ どのくらい？ え、それだけじゃダメよ」

なかには、自腹で洗剤を五箱も買つて届けた先輩もいました。山田クンは、そういうことは絶対にしなかった。なぜなら、昔から正義感が強く、裏工作は嫌いだったからです。

しかし、現実には厳しいものです。ねえ。成績が上がらなければ、仕事を続けることもできません。このままでは、店に居づらくなつて、新聞配達すらやれなくなつてしまう。

山田クン、落ち込みました。大阪に帰ろうかとも思いました。

そんな時、ひとりの先輩が山田クンに声をかけました。

「おい、山田、お前は自分のことばかり考えていないか。こういうやり方は許せない、とか不正は嫌いだ、とか。それつて、考え方によれば、自分勝手、ひとりよがりじゃないか。もつとお客さんに感謝しないとイケないんじゃないか」

「感謝してますよ。でも、お客さんは勝手なことばかり言うんですよ」

「ほら、みろ。お客さんを批判しているじゃないか。いいか、お客さんは言いたいことを言つていいんだ。こっちが勝手にお願いしているんだから。だから、お客さんに文句を言われることに感謝しろ。見ず知らずのお前に話してくれるんだから」

山田クン、なんだか納得いきませんでした。が、とにかく、お客さんに感謝しようと思ひました。そんなある日、マン

シヨンの一室を訪ねて、新聞の勧誘を行いました。たまたま、お客さんが不機嫌だったのでしょうか。

「馬鹿野郎、だいたいお前がこんな時に来るからいけねえんだ。競馬で大損しちゃつたじゃねえか。弁償しろよ、この野郎！」

もう無茶苦茶でした。

でも、この日の山田クン、心が落ち着いていました。頭を徹底的に下げ続け、ドアがようやく閉まつても深くお辞儀をしたのです。「どうも、僕の話聞いてくださつてありがとうございます！」と言いながら。

すると、隣のドアが開き、ひとりの男性が、頭を下げている山田クンに声をかけてくれたそうです。「ずつと、話は聞いていたよ。君はえらいね。僕が新聞をとつてあげよう」

三遊亭鳳豊師匠のエッセーです。普通なら、他人様が書いた文章を使わせてもらうことなんて、あり得ない話ですが、「喜んでくださる人がいるならどうぞ」と、快く転載を許可してくださつた鳳豊師匠。

今では「裏面の人情噺を、毎号楽しみにしています」と、多くの方から喜んで戴かれています。その鳳豊師匠が、一冊にして発行されたということで、早速注文しました。

『もろ一しの山車』

気付いたら、いつの間にか忘れてしまった遊びがあります。戦後じきの頃まで、畑の周りに『もろこし』を植えました。収穫したキビがらで、男の子は山車を作りました。幕はきれいな花柄や赤い布などでしたね。車輪も手作り、中にロウソクをとめて、夜になるとみんなで引き出して外で遊びました。不器用な私は完成した記憶がないのですが、どなたか作り方を覚えている人、いないでしょうか。作れる方がいれば、来年タネを探して育てたいと思っています。